



さくら 2007 初春

発行
社会福祉法人 東桜会
第 14 号
〒420-0962
静岡市葵区東 527 番地の 1
特別養護老人ホーム 麻機園
TEL 054(247)8739
FAX 054(247)8640

明けましておめでとうございます

理事長 長谷川達也



新年早々の話題としてはふさわしくないと思われませんが、ノロウィルスによる感染性胃腸炎により、入所者の皆様には大変ご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした。全国的に流行したとは言え、快適な生活ができる住環境を目指す麻機園にとっては、思いもよらないことでした。関係機関をはじめ、ご家族様への迅速な報告や、指導に基づく措置は、適切に実施しましたが、かつて経験したことのない重大な事として責任を痛感しております。これを今後の施設運営の参考にしてまいりたいと思います。

こんな中でありがたいなと思ったことがあります。職員も感染してしまい、少ない人員での過密な勤務日程の中で、全員が一丸となり介護に当る姿を見て、ほんとに頭の下がる思いでした。一旦事ある時、麻機園の職員はすばらしい力を発揮すると改めて感心し、入所者からもおほめの言葉をいただきました。皆様お疲れさまでした。

話は変わりますが昨年の暮れ、山の好きな仲間の忘年会に初めて参加しました。山にも行っていない私には、場違いのように思えたが、奨めもあって行ってみました。お酒を飲みながら勝手気ままな話をし、何の変哲もない飲み仲間ですが、明るく居心地がよい会でした。終わりに全員で肩を組んで“遠き山に日は落ちて、星は空をちりばめぬ”とドヴォルザークの“新世界より”を大声で歌って締めました。何故か涙が止まらない...遠い昔を思い出し懐かしく思え、年かなとも思いました。この会は15、6人の小さな会ですが、20年間脱退者がなく続けている事を知りました。友人が言うのには、「何でも話し、何でも相談にのる仲間で、心にわだかまりがないから長続きするんだよ。」「うちの会社も小さな担当毎に丸くなって話をする仲間を作っている。」との話もありました。本日のコミュニケーションの大切さを感じると同時に清々しい一日でした。



希望に満ちた新年のあいさつが、ノロウィルスの話ではじまり、飲み仲間の話で終わってしまいました。

法人では、介護保険法改正以降、経営面も含め、難しい問題はありますが、創意工夫により、全員で更に愛される明るい麻機園やケアハウス桜花を造れるよう努めたいと思います。

新しい年がすばらしい一年でありますように。

これからの役割

静岡市有永グループホーム ホーム長 秋山真由美

平成18年は私にとって節目の年になりました。

一つは、満40才になったことで、やっと大人になったという自覚が芽生え、自分の足で歩いていける年になったと実感しています。今までは、いろいろな方々に道しるべを示していただきながら歩いていたので、40才の誕生日を境に自分が道しるべを示すことを役割にして行こうと思いました。

もう一つは、「認知症介護指導者養成研修」に参加できた事です。この研修は、毎年静岡県内から3名しか参加することができず、希望すれば受講できるというものでもありません。幸い私は、静岡市長の推薦をいただいて受講することができました。

5月から7月の3ヶ月間、苦しみもあり、喜びもありの長期間の研修でしたが、“学び”が多く「どうして、もっと多くの方が受講できないのか？」と残念に思うほどのたいへん充実した研修でした。

研修の内容は「認知症って何？」から始まり、「認知症の人をどう支えるか、生活をどのように共にするか？」等々から「認知症の人をより多くの人に理解していただく」というところまでを学んできました。認知症の人のことだけを、思い、学んだこの3ヶ月間は、認知症の人をより好きにさせてくれ、もっともっと認知症の人のためになりたいと強く思わせてくれました。

無事に研修修了証を戴き、9月からは、「認知症介護実践者研修」という、グループホームの管理者や計画作成担当者が、必ず受講しなければいけない研修の講師をさせていただきました。また「認知症サポーター養成講座」の講師も務めさせていただき、少しでも多くの方に認知症の人の事を知っていただけるよう、未熟ながらも皆さまの前に立たせていただいております。まだまだ、講師として学びがありますが、認知症の人のために日々努力し、より多くの方に認知症の人を理解していただき、認知症の人々が住みやすい環境を整えるお手伝いを続け、少しでも道しるべを示していきたいと思っています。

認知症サポーター養成講座とは、認知症を理解し、認知症の人やその家族を温かく見守り、支援する人を養成する講座です。

ヨーロッパ研修に参加して

麻機園 副寮母長 足立景子

9月30日～10月14日の2週間、イギリス・スウェーデンに海外研修の調査派遣団員として参加しました。イギリスでは主にロンドン市を視察しました。街の中心部には緑が多く、広大な公園や石で造られた古い建物がどっしりとその国の歴史を物語っている様でした。また世界的にも有名な美術館がたくさんあり、しかもそのほとんどが入場無料なので気軽に行きやすく、小さな子供や車椅子に乗ったお年寄り、観光客、誰もが分け隔てなく絵画や美術品を鑑賞し楽しむことができます。しかし、イギリスには今も階級が存在します。特にロンドン市内には様々な人種が生活しており、また、住む場所によっても払う税金に差があります。豊かな地域があれば貧困な地域もあり、隣接する地区でありながら平均寿命が10歳違うという話も伺いました。医療は無料で提供されます。「ゆりかごから墓場まで」と以前は病院で余生を過ごす方が多くいましたが、この10年位で「人は家庭的な場所で死ぬ。病院は高齢者の最期に見合ったものではない。」との理念の下、治療を終えた方は直ちに退院しなければなりません。無料で提供される医療は最低限のもので、軽傷の場合は後回しにされ、治療するのに2ヶ月間待つこともあるそうです。自分でお金を払って医療を受ける方もいますが、やはり料金が低いとのこと。福祉サービスは有料です。今回視察した比較的裕福な地域にあるナーシングホームでは、建物内に入るとすぐにマニキュアやパーマをかけている入居者の姿が目に入りました。掲示板には、その日に行われるダンスやバスケットボール、コンピューター等の活動が掲示され、入居者が選び参加します。また、貴族やお金持ちの方が利用する、郊外のホテルのような施設を視察した際は、職員の姿も入居者の姿もほとんど見ることができず、入居者同士が集まってレクリエーションをすることも、洗濯畳み等の作業をすることもなく、常にお部屋の中で過しているようでした。

スウェーデンは、どこまでも続く牛や馬の放牧風景が広がっています。その国民性は誰もを違和感なく受け入れ、そして自分が自分であるという主張が感じられます。選挙の投票率は90%近く、税金がどのように使われているか等、政治に関心が高いそうです。子供は18歳位で独立し、家を出て生活するため、核家族で、何世代も一緒に住むことはありません。老後をどうするか、どこで暮らすのか、自分で決め、子供の世話になりたいという選択肢はその中にありません。施設内においても、ご利用者が全てを決定します。イギリス・スウェーデン共に、ケアワーカーの健康と安全上『人が人を持ち上げる』行為は法律で禁止されており、必ず機械を使用して行います。これはどの職種にも共通です。一日研修した施設で、ベッドからソファに移動する為のリフトを体験しました。リフトの操作でも一人で行うことはしません。実際リフトに吊り上げられてみると、怖いと感じることはなく、人の手でぎゅっと捕まれ痛い思いをすることもありません。職員は利用者の手を握ったり、肩を撫でたりして関わっていましたが、それは決してべったりとした関係ではなく、自分が大切、だから相手も大切という人間性が見えるような気がしました。異国から来た私に対し、丁寧に仕事の内容を教えてくれるだけでなく、昔から友人のような親しみのある態度で接してくれました。

どの視察先の担当者も「遠い日本から私達のところに来てくださったことに大変感謝すると共に誇りに思う」と話していました。福祉先進国イギリス・スウェーデンは、それぞれ違いがあるものの、両国とも「我が国は福祉の国」と自信を持っている姿勢が伺われました。

この2週間は、私にとって本当に貴重な経験になりました。この経験を麻機園にどのようにお返ししたらよいのだろうとずっと考えていました。国の制度も国民性も違うので、見てきたことをそっくり真似することはできません。でも、ひとつ共通して言える一番大切なことは、お年寄りに接する態度です。言葉がうまく通じないことは大きなストレスであり、知っている限りの言葉で一生懸命理解してもらおうとします。その結果、優しさに安心したり、味方と感じていただけるのではないのでしょうか。私はお年寄りと関わる仕事をしていて、この経験を一番のお土産として頂きました。利用者の皆さんから、安心して、味方だと感じてもらえる職員でありたいと思います。

本当に素敵な機会を与えてくださった職場と皆さんに感謝です。ありがとうございました。



私は毎日が楽しい。毎日楽しい気持ちでいると自然に笑顔になる。笑顔でいると笑顔の人が集まってくる。類は類を呼ぶ。しかし、それもまた「縁」だと思ふ。麻機園には笑顔がたくさんある。そこに私も呼ばれたのだから感じる。私達の仕事には、笑顔を増やしていくことが大切だと思っている。職員が毎日笑顔でいると、入所者の笑顔も増えていく。その入所者の笑顔を見て、また自分も笑顔になつて温かくなつていくと思う。『縁』あつてこの文章を書くことになり、自分を考えるよい機会になつた。読んでくださった方も何かの『縁』、これからよろしく。

最近、私はよく「縁」について考える。介護の仕事に就いたこと、麻機園の職員、入所者と出会ったこと、病気で入院したこと、生きていくと色々なことに巡り会う。出会いは別れ。全てが縁によって結ばれていくような気がする。「縁」と言っても良いものばかりではない、悪いものもある。良縁は素直に喜び、そうでないものは結果的に良縁に繋がる為の忠告、助言だと考える。強引かもしれないが、この前向きな考え方が今の私の原動力だ。そのため、周りの人から「いつも楽しそう」、「悩みがなさそう」、「よく言うね」。決して悪いことではないと思う。私はそれを褒め言葉として受け取るようにしている。気楽に生きていくと、言われたらそれまでだが、自分では、楽に生きるために努力していると思ふ。それは言い過ぎかな。しかしそんなことを言ってしまう自分が好きでもある。

縁

麻機園 寮母 海野隆由